

『竹取物語』、「竹公主」から「斑竹姑娘」へ

宋 成 徳

「斑竹姑娘」は君島久子、百田弥栄子、伊藤清司^(二)による発見、紹介以来、『竹取物語』との関係において、多くの論議を招き、注目を浴びてきた。両者の影響関係について『竹取物語』から「斑竹姑娘」へという流れであるのがほぼ定説に成りつつある。とりわけ、奥津春雄の『竹取物語の研究』^(三)に極めて詳細な分析、考察が行われている。その内容を一言で纏めると、「戸語故事」を源流とするチベットに流伝していた物語を整理して田海燕が『金玉鳳凰』という物語集を出しているが、「斑竹姑娘」の話は「戸語故事」の原話にはない、原話にあるとしても「戸語故事」がチベットに伝わった時期が十一世紀頃であると考えられているから『竹取物語』への影響は考えられないということである。

「斑竹姑娘」から『竹取物語』への流れが否定されると同時に、前者の後半の求婚談と『竹取物語』の求婚談のあ

まりの酷似によって自然に提起されるのが『竹取物語』から「斑竹姑娘」への影響説である。本論文はその過程を明らかにすることを主旨とする。

まず、「斑竹姑娘」と『竹取物語』との関係の研究において、全く無視されてきたわけではないが、「斑竹姑娘」という文献を考える場合、筆者は以下二点を重ねて断っておきたい。

一つは、「斑竹姑娘」は一九四九年中華人民共和国成立以後の当代作者の創作作品である。

もう一つは、「斑竹姑娘」は創作方法、創作段階から予想していた読者群などいずれの面から見ても児童文学作者の児童文学の範疇に属する作品である。その作品が素材を民間説話、或いは古典文学、或いは外国文学から借りたとしても、それは児童文学作品であり、民間説話ではない。同時に古典文学、外国文学作品でもないのも同じ道理であ

る。田海燕自身がどう語っていたにしても、「斑竹姑娘」が児童文学作品であるということは変わらない。田海燕の古くからの友人である劉東遠が書いた『金玉鳳凰』（一九九二年版）の序文の内容もこの認識に一致する。

『竹取物語』から「斑竹姑娘」への影響の可能性を考える直接の根拠は、「斑竹姑娘」の原話から『竹取物語』への可能性を考える根拠と全く同じであるが、その推測を可能にする前提は、次の二つである。一つは、言うまでもなく、「斑竹姑娘」が『竹取物語』より遙かに後に出る文献であること、もう一つは従来の一方通行的な日本の中国文学受容の流れに二〇世紀初頭からその逆流も生じたことである。

『竹取物語』から「斑竹姑娘」への影響の具体的な過程について、第二次世界大戦時、中国内陸へ侵入していた日本軍兵士のある偶然のきつかけで原地人に語った『竹取物語』が人々の伝承に依って金沙江辺のチベット人の間で広がり、田海燕によって記録、整理されたのが今の「斑竹姑娘」の後半であると推測する人もいるが、これは「斑竹姑娘」がチベットに伝わっていた民間説話であるという錯覚から、日本とチベットとの間の壮大な地理的な空間を埋めるための空想であり、否定出来ないと同時に証明も出来ない。この他にも多くのもっと有力な候補を立てることが

出来るが、いずれも推測の範囲から抜けられない。

中国での日本文学の翻訳、紹介は二十世紀初期から始まっているが、系統的な紹介の専門著書は一九四九年までは謝六逸（一八九八～一九四五）の『日本文学史』のみである。謝六逸は一九一八年春に日本に留学し、一九一九年早稲田大学専門部政治経済科で学び、専門の勉強の傍ら西洋と日本の文学にかなり熱心だったらしい。その時の熱心な勉強の結果が帰国して書き上げた『西洋小説発達史』と『日本文学史』である。謝はまだ日本滞在中の一九二二年一月、周作人、鄭振鐸、沈雁氷が北京で「文学研究会」を発起した当時、それに加わって文学関連の文章を発表し続けていた。帰国してからは、上海で商務印書館の編集、暨南大学教授などを経て、一九二六年二月からは復旦大学の中国文学学科で西洋文学と日本文学の講義を開設し、一九二九年に新聞学科を創設した。北新書局による『日本文学史』の出版もこの年である。

謝六逸の『日本文学史』の第三章「中古文学」では五頁ぐらいの文章で『竹取物語』の梗概が述べられている。田海燕がこの梗概を見たことがあるかどうかは不明であるが、「斑竹姑娘」の文章がこの梗概から来たと判断出来る証拠はない。

『竹取物語』の梗概が述べられたもう一つの書物として、

鄭振鐸の『文学大綱』がある。本書は一九二四年一月十日から『小説月報』（第15巻第一期）で連載され、一九二七年上海商務印書館が出版し、一九三三年八月に『大学叢書』に収められ再版されるが、『竹取物語』の梗概は第十九章の「中世紀的日本文学」で二頁に纏まったものも簡略なものになっていた。章末では参考書目として W.G. Aston の「Japanese Literature」とこの本の芝野六助の日本語訳などを挙げると同時に、この章の完成は謝六逸君の多大な協力を得たのみならず、その中に謝の日本文学史講義の原文を襲用した部分が多くあると注記している。上でも言及したように、鄭振鐸と謝六逸は同じく「文学研究会」のメンバーでもあった。一九二二年、鄭が「文学旬刊」の編集長を辞めた時、その後を継いだのも謝であって、二人は文筆活動に於いてだけではなく、個人的にも長い間親密な友人であった。

『文学大綱』の梗概では五人の求婚者の探し物の一つが「龍首の五色石」となり『日本文学史』の「龍頭上の五色玉」とは、些か異なりが見られるが、依然として「斑竹姑娘」との繋がりは認められない。

しかし、一九四九年以降と、それ以前の児童文学創作状況を調べて見ると、意外な資料が視野に入ってくる。それは「竹公主」である。その作者もまた鄭振鐸である。

「竹公主」は一九二二年一月七日に創刊された中国最初の児童文学専門週刊誌『児童世界』で創刊次号の一月十四日から八期に渡って連載された作品で、『竹取物語』の「訳述」である。その「訳述」者鄭振鐸は『児童世界』の創刊から一年間主編集長を務めていたが、創刊当初は殆ど一人で作品を書き上げていて、その後、葉聖陶、趙景深が加わる。

「竹公主」は一九二七年「児童世界叢刊」の一つとして出版される。その前の一九二五年一月は「文学研究会叢書」の一つ『天鵝』に収められ、商務印書館によって出版され、一九三九年に再版される。「竹公主」の本文の終わりには、『竹取物語』と明記こそしていないが、「日本の神仙故事、鄭振鐸譯述」と示されている。『天鵝』には『竹取物語』の「譯述」以外に、日本の童話二話とイギリス、北欧、インド、ロシアなどの童話三十四話を翻訳したり、再話したり、部分的に削除して梗概を述べたりして載せている。ここでは『天鵝』は暫くおいて、「竹公主」と「斑竹姑娘」を比べながら、両者の関わりを明らかにし、最終的には「斑竹姑娘」と『竹取物語』の関係を説明することを試みる。

「竹公主」は「月宮」、「五公子」、「釈迦之石鉢」、「宝玉樹枝」、「火鼠衣皮」、「燕巢裏的貝殼」、「龍珠」、「富士山之煙雲」と八段によって構成された『竹取物語』の再話

で、原話と比べてみると大きな違いは二つある。

一つは、原話にない最初の「月宮」部分の大胆な増設である、この部分は求婚話と必然的な繋がりが無い児童趣味に合わせた作者の任意の書き加えである。「斑竹姑娘」も後半の求婚話と前半部のストーリーから成って、「竹公主」とある意味で同じ構成と言える。ただ「斑竹姑娘」は求婚話以前の部分が異常に膨張して、物語全体が歴然たる二部構成になっている。二つ目は、「竹公主」の求婚者が難題に出された宝を求める話が「釈迦之石鉢」、「宝玉樹枝」、「火鼠衣皮」、「燕巢裏的貝殻」、「龍珠」となっていて、『竹取物語』原話と最後の二話の順番が入れ替わったことである。入れ替えた理由については色々推測できるが、それとはかく、「斑竹姑娘」も『竹取物語』の原話に酷似しているにも関わらず、最後二話の順番が「竹公主」と同じくなっている。

このように「竹公主」と『竹取物語』の違いを比較してみながら「斑竹姑娘」に对照してみると、「斑竹姑娘」が「竹公主」により近いことに気づく。

全体的な構造以外に、五人の求婚者の設定も「竹公主」と「斑竹姑娘」との間には意外な関わりがありそうに見える。『竹取物語』原話中の五人はいうまでもなく、石作の御子（こころの支度ある人）、くらもちの皇子（こころた

ばかりある人）、右大臣阿部のみむらじ（財ゆたかに、家ひろき）、大納言大伴の御行、中納言石上の麻呂足であるが、この五人をモデルにして「竹公主」は「官家の子弟」、「非常有錢の人」、「世代做官的」、「一個最愛誇口、又是膽子極小的人」、「家裏也是有錢有勢的、非常驕傲自視極高」という性格を有する人物を登場させる。「斑竹姑娘」の五人の設定は「土司的兒子」、「商人的兒子」、「官家的兒子」、「胆小而又喜歡吹牛的少年」、「驕傲自大的少年」で、『竹取物語』の五人との繋がりがすぐには認められない。

しかしこの五人は、全く「竹公主」の五人からの脱胎だと言っても過言ではない。「斑竹姑娘」の前の三人は身分で示し、後の二人は性格分類になっていることはどうしても不自然で、その理由を解するに当たってすっきりした答えが出て来ないのは誰でも気づく。奥津春雄は『竹取物語の研究』で、「初めの三人は身分階級で示し、あとの二人は前の三人の性格内容の一部を人格化したようなものだとすれば、何も五人でなくてもよいわけである。それでもやはり求婚者は五人であり……」と述べているが、後の二人は前の三人の性格内容の一部を人格化したものではなく、「竹公主」の「燕巢貝殻」、「龍珠」を探しに行った「家裏也是有錢有勢的、非常驕傲自視極高」、「一個最愛誇口、又是膽子極小」という性格を有する人物をそのまま受け継い

だもので、その原形は中納言石上の麻呂足と大納言大伴の御行である。

以上大きな枠組みでの「竹公主」と「斑竹姑娘」との類似を述べて来たが、文章の細部に立ち入って『竹取物語』を参照しながら読み比べると、また「竹公主」と「斑竹姑娘」との間のいくつかの類似箇所を指摘することができる。

『竹取物語』では火鼠の皮衣の所在について「西の山寺にありと聞きおよびて」とし、西の山寺での具体的な話は展開しない。「竹公主」では、

他們到了山上、到處找不到寺院。祇是在山頂上找到了幾根石柱和許多石階。可以知道當初實是有一所寺院在那個地方。他們大喜、在亂石中細細的尋找。最後在石堆下面找到了一個鐵箱。(二)

と話を展開させる。「斑竹姑娘」も主人公が山に辿り着いた後、すぐ寺を見つけたことが出来ず、ちよつとした曲折を経ることと、見つかったのが寺そのものではなく、廢蹟であつたことが「竹公主」と一致する。その原文を引用すると次のようである。

雪山是找到了、可是找不到那座古廟。他又耐心地在雪山裏探尋、還是找不到古廟、只在一個山頂上、找到了一堆碎瓦類垣。但出乎意外、在碎瓦類垣裏發現了一個石匣。(三)

「竜の頸に五色に光る玉」を探す話は、『竹取物語』では大納言大伴の御行が播磨の明石の浜に漂着して、「国に仰せ給て、手輿つくらせ給て、によく／＼担はれ給て、家に入給ひぬる」と家に戻るが、「竹公主」では主人公が海岸に辿り着いた後を次のように述べた。

這個海岸離他本郷很遠。陸路是不能通的。他又不敢再坐船了。所以就留在這個地方、過他的餘生。(四)

陸路では本郷まで行けない海岸に漂着してそこに流落するようになることは「斑竹姑娘」も一致する。その原文を引用すると次のようである。

但又找不到任何通大陸的路徑、只好死心、帶着那些手下人住在島上、永遠流落海外了。(五)

ただ、また「後來、有些人背着他上船漂海、回到了家鄉、送了消息給斑竹姑娘。」と永遠に海外に流落したと言いながら、本郷に戻ったと述べ、矛盾で物語でほぼ何の働きを果たさない一言を書き添えている。

「斑竹姑娘」の求婚話は「竹公主」の本文に比べるとかなり簡略な叙述になっている。それにも関わらず、文章の細部まで類似を持っていることは、田海燕の再話は「竹公主」のストーリーだけ聞いた上の再話ではなく、「竹公主」の本文を見た上での再創作であるとはほぼ断定出来る。

結論を言えば、「斑竹姑娘」の後半の求婚話は『竹取物

語」ではなく「竹公主」の再話である。勿論、「竹公主」は『竹取物語』の再話であるから、「斑竹姑娘」の求婚話の原話は『竹取物語』にある。

田海燕がどういうきっかけで、どういう形の「竹公主」の本文に触れたかは一切不明であるが、「日本の神仙故事、鄭振鐸譯述」のような注記が削られたにしても、第八段の「富士山之煙雲」を削除した本文でさえなければ、「竹公主」の原話が日本の物語であると知り得た可能性はある。しかし、彼がその原話が『竹取物語』だと知っていたとは必ずしも言い切れない。

〈注〉

- (一) 百田弥栄子「竹取物語の成立に関する一考察」(『アジア・アフリカ語学院紀要』第三号、一九七二年十一月)、君島久子「チベットの『竹娘説話』と『竹取物語』」(『説話文学研究』第六号、一九七二年三月)、伊藤清司『かくや姫の誕生

——古代説話の起源——』(講談社現代新書、一九七三年二月)など。

- (二) 奥津春雄『竹取物語の研究——達成と変容——』(翰林書房、二〇〇〇年二月)

- (三) 奥津春雄『竹取物語の研究——達成と変容——』(翰林書房、二〇〇〇年二月)

- (四) 文学研究会叢書『天鵝』三九頁(商務印書館、一九三九年版)

- (五) 『金玉鳳凰』一八九頁(少年兒童出版社、一九六一年版) 原書本文の漢字を本論文では繁体字に改めて引用した。

- (六) 文学研究会叢書『天鵝』五三―五四頁(商務印書館、一九三九年版)

- (七) 『金玉鳳凰』一九一頁(少年兒童出版社、一九六一年版) 原書本文の漢字を本論文では繁体字に改めて引用した。

(そう せいとく・修士課程)